京都大学	博士（社会健康医学）	氏　名	Bhagabati Panday Ghimire
論文題目	**Vulnerability to HIV infection among female drug users in Kathmandu Valley, Nepal: a cross-sectional study** （ネパール王国カトマンズバレーの女性薬物使用者の HIV 感染に対する脆弱性について）		

（論文内容の要旨）

Background

Women who use drugs are extremely vulnerable to HIV and sexually transmitted infections (STIs), but studies on risk behaviours and HIV infection among female drug users are limited in Nepal.

Methods

In this cross-sectional study conducted between September 2010 and May 2011, HIV prevalence and risk factors for HIV infection were investigated among female drug users recruited in drop-in centres, parks and streets in the Kathmandu Valley. The participants completed face-to-face interviews for a structured questionnaire, HIV pre-test counselling, specimen collection for HIV test and they were provided with their results at post-test counselling.

Results

A total of 269 female drug users were recruited, of whom 28% (n=77) were found HIV positive; the majority (78%, n=211) being injecting drug users and aged below 25 years (57%, n=155). Nearly half (n=137) of the total participants had shared needles or syringes in the past month, and 131 and 102 participants were involved in commercial or casual sex respectively with only half or less of them having had used condoms in the last 12 months. In multivariate analysis the variables associated with HIV infection included: (a) older age; (b) history of school attendance; (c) higher frequency of sharing of injection instruments; and (d) unsafe sex with commercial or casual partners.

Conclusions

HIV was highly prevalent among female drug users in the Kathmandu Valley, with its risk being strongly associated not only with unsafe injection practice but also with unsafe sexual behaviours. Awareness raising programmes and preventive measures such as condom distribution, needle or syringe exchange or methadone maintenance therapy should be urgently introduced in this neglected subpopulation.

（論文内容の要旨）

【研究の背景】

女性薬物使用者（FDU）は、HIV や性感染症に対する脆弱性が高いことが知られているが、この集団の HIV 感染や行動リスクに関する研究は、ネパール王国ではほぼ皆無であった。

【研究方法】

本研究は、2010 年 9 月から 2011 年 5 月にかけて、同国の首都を含むカトマンズ峡谷域において、FDU における HIV 感染率と HIV 感染リスク要因を見積もるために実施された横断研究で、参加者は、現地 NPO と共同で、ドロップインセンター、公園、街頭でリクルートした。参加者に対しては、構造化質問票に基づく対面式の面接調査、HIV 抗体検査、検査前後カウンセリングを同意の上、実施した。

【結果】

269 人が参加し、155 人（57.6%）が 25 歳未満、211 人（78.4%）が静注薬物使用者、77 人（28.6%）が HIV 陽性であった。過去 1 年に、137 人（50.9%）に注射用具共用があり、131 人（48.7%）にコマーシャルセックス、102 人（37.9%）にカジュアルセックスの経験があったが、コンドーム常用者は半数以下であった。ロジスティック回帰分析では、①年齢 25 歳以上、②就学歴あり、③高頻度の注射用具共用、④無防備なコマーシャル／カジュアルセックス、が HIV 感染と有意に関連し、多変量モデルは良好な適合度を示した。

【結論】

本研究により、①カトマンズ峡谷域の FDU においては HIV 感染率が高いこと、②HIV 感染は、不衛生な注射行動だけではなく、無防備な性行動とも強く関連していることが明らかとなった。このグループに対しては、啓発プログラム、コンドーム配布、清潔な注射用具の提供、代替薬物療法などの対策が早急に実施される必要がある。

（論文審査の結果の要旨）

女性薬物使用者（FDU）は、HIV や性感染症に対する脆弱性が高いことが知られているが、この集団の HIV 感染や行動リスクに関する研究は、ネパールではほぼ皆無であった。本研究は、2010 年 9 月から 2011 年 5 月にかけて、同国カトマンズ峡谷域において、FDU における HIV 感染率と HIV 感染リスク要因を見積もるために実施された横断研究で、現地 NPO と共同で、ドロップインセンター、公園、街頭で FDU をリクルートし、構造化質問票に基づく面接査と、HIV 抗体検査、検査前後カウンセリングを同意の上、実施した。

269 人が参加し、155 人（57.6%）が 25 歳未満、211 人（78.4%）が静注薬物使用者、77 人（28.6%）が HIV 陽性であった。過去 1 年に、137 人（50.9%）が注射用具共用、131 人（48.7%）がコマーシャルセックス、102 人（37.9%）がカジュアルセックスの経験があったが、コンドーム常用者は半数以下であった。多変量解析では、①年齢 25 歳以上、②就学歴あり、③高頻度の注射用具共用、④無防備なコマーシャル／カジュアルセックス、が HIV 感染と有意に関連し、多変量モデルは良好な適合度を示した。

以上、本研究は、ネパールの FDU に関する初めての疫学的研究で、HIV 感染率と、彼女らが静注薬物使用と性行動による複合リスクに曝されている状況を明らかにした社会的意義の高い研究である。

したがって、本論文は博士（医学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成 26 年 3 月 24 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。

要旨公開可能日　　年　　月　　日